

重複形容詞と重複形容動詞

一

本稿は、これまで疊語について考察してきた前稿(一)「語の文法的構成——疊語について」^①・(二)「形状言の重複の二形態」^②・(三)「一部重複と縮重複」^③・(四)「重複形容詞の構成」および前稿(一)「重複形状言・重複接尾形状言」^④・(二)「動詞の重複とツツ」^⑤を承けて、前稿(四)に述べた重複形容詞に関連しつつ、それとともに重複形容動詞について考えようとするものである。

前稿(四)において、重複してシを伴い形容詞を構成したものを重複形容詞と呼んだ。同様に、重複してナリを伴い形容動詞を構成したものを重複形容動詞と呼ぶこととする。尤も、右にナリを伴い云々と述べたが、改めて言うまでもなくナリはニナリが縮約したものであり、従って、より厳密には、重複してニを伴い多く情態副詞に

あらわれたものがナリを伴って形容動詞を構成したものとすべきところである。

蜂 矢 真 郷

右のナリ活用のものに対して、重複してタリを伴い形容動詞を構成したところのタリ活用のももやはり重複形容動詞に含まれる。けれども、タリ活用の形容動詞はそのほとんどが漢語のものであり、和語のものは

カツ／＼タリ(興福寺藏大慈恩寺三藏法師伝承徳三年頃点・類聚名義抄観智院本) マチ／＼タリ(石山寺藏大唐西域記長寛元年点)

が知られているに過ぎない^⑦。今は、和語のもの構成について考えようとするので、タリ活用の重複形容動詞は、和語の例、カツ／＼タリ・マチ／＼タリがありはするが、以下の考察の主な対象とはならない。また、ナリ活用のそれについても、漢語のものは基本的に

考察の対象から除くものとする。

また、近稿(一)において重複形容動詞にふれた際には、その重複素が形状言であるものに間接的にふれただけであったが、以下に見るようにその重複素は形状言のもの他に名詞や動詞(連用形)のものがある。前稿(四)では必ずしも十分にふれ得なかったが、重複形容詞の重複素も形状言・名詞・動詞(連用形)などのものがあり、この点で重複形容詞と重複形容動詞との共通性を窺うことができよう。

二

まず、重複形容動詞の例を挙げることにしたい。

それに当たって、重複形容詞との比較の便を考慮して、前稿(四)において重複形容詞の例を挙げた際に

(イ)『時代別国語大辞典上代編』が見出し語とするもの。

(ロ)源氏物語に用例のあるもの。

(ハ)類聚名義抄観智院本に例のあるもの。

をすべて採るといふ基準を設けたのにならいたいと考えるが、しかしながら、右の(ロ)(ハ)はよいとして、(イ)については『時代別国語大辞典上代編』は形容動詞を見出し語としていないので、この(イ)をそのまま重複形容動詞の例を挙げるのにも適用することはできない。そこで、

重複形容詞と重複形容動詞

萬葉集・古事記(仮名書き部分)・日本書紀(同)・風土記(同)・続日本紀(同)・祝詞に用例のあるもの。

を新たに(イ)として、(ロ)(ハ)の範囲から重複形容動詞の例を挙げることにする。なお、後に重複形容詞について述べる際にも、前稿(四)を修正して(イ)(ロ)(ハ)の範囲から例を挙げることにしたい。

さて、重複形容動詞の例を、重複素別に、(1)形状言の重複、(2)名詞の重複、(3)動詞(連用形)の重複、のように分類して挙げる(イ)・ロ・ハの注記は右の(イ)(ロ)(ハ)のいずれの範囲から採ったかを示すものである。⑧。

(1)形状言の重複 タゞナリ カマ／＼ナリ ウツ、ナリ シブ

／＼ナリ ヨソ／＼ナリ〔装々〕 コト／＼ナリ〔異々〕 オホ
、ナリ モロ／＼ナリ

(2)名詞の重複 ナカ／＼ナリ クサ／＼ナリ ソバ／＼ナリ

サマ／＼ナリ カズ／＼ナリ ココロ／＼ナリ

(3)動詞(連用形)の重複 ナミ／＼ナリ トリ／＼ナリ ヤセ

／＼ナリ カレ／＼ナリ〔枯々〕 ツレ／＼ナリ

なお、(1)のオホ、ナリは、

欝（魁）ヨホ、ナリ（魁）（仏下本一二七〔65オ〕）

とあるが、正宗敦夫氏編「類聚名義抄仮名索引」に「オホ、ナリにてはなくや」とあるのによってオホ、ナリの例と見たものである。

右は、重複してナリを伴ったものに限ったのであるが、ニアリが縮約していないものを、ニとアリとの間に助詞が介在しているものを含めて、改めて(イ)(ロ)の範囲から挙げると、右に挙げたものに包摂されるもの他に、

(1)ジバニアリ …山はしも之自尔安礼等毛√川はしも多に行

けども…(萬四〇〇〇)

(3)ジノビノニアリ 御文は忍びノにありけり(真木柱)

の例を追加することができる。以下、これらも重複形容動詞の例に含めて扱う。

これでは例が少ないので、参考として、(イ)(ロ)に限らず上代・中古の範囲からさらに例を拾うと、

(1)ホトノナリ(雄略紀八年前田本・同図書寮本)

(2)シナムノナリ(石山寺藏大唐西域記長寛元年点) ヨソノナ

リ(余所々々)(夜の寢覚)

(3)チリノナリ(大鏡)

を挙げることができるが、依然として例は多くない。なお、以下、これら参考として挙げたものについては括弧を付して示すことにする。

以上の例について見ると、全体として例が多くないので必ずしもはっきりしないが、(1)形状言の重複のものが最も多く、以下、(2)名

詞の重複、(3)動詞(連用形)の重複、の順になっている。

重複素の末音節については、(1)形状言の重複のものは基本的にア・ウ・オ列のものでその他にイ列のものが1例あり、(2)名詞の重複のものはア・ウ・オ列のものばかりであり、(3)動詞(連用形)の重複のものは当然のことながらイ・エ列のものばかりである。(2)名詞の重複のものにイ・エ列のものが見られてもよさそうなところであるが(前稿(一)参照)、その例は見当たらない。このことが偶然であるかどうかについては、全体として例が多くないこともあって明らかにならない。

一重複素の音節数については、二音節のものが多い。(1)ウツ、ナリ・オホ、ナリは、重複素が二音節で、前稿(三)に述べた縮重複のものである。この2例はいずれも形状言の重複のものであるが、縮重複・一部重複が基本的に形状言の重複に見られること、前稿(三)に述べた。他に、一音節のものとして(1)タバナリ・シバニアリ、三音節のものとして(2)ココロノナリ、(3)シノビノニアリがある。

以上、この節では重複形容動詞について概観した。

三

重複形容詞の例は既に前稿(四)に示したが、前稿(四)を修正して重複形容動詞と同様に(イ)(ロ)の範囲から例を挙げ、改めて重複素別に分

類して示すと次のようである。^⑩

(1) 形状言の重複

ナガ〜シ マガ〜シ ワカ〜シ スガ
 ムク〜シ ツガ〜シ ヒガ〜シ アダ〜シ クダ〜シ
 アハ〜シ コハ〜シ セハ〜シ セバ〜シ カマ
 シラ〜シ イマ〜シ アラ〜シ ムラ〜シ キラ〜シ
 ムク〜シ ワ、シ サウ〜シ サク〜シ スク〜シ
 ムク〜シ タヅ〜シ ヤツ〜シ イツ、シ ヤム〜シ
 シ ユ、シ カル〜シ コヤシ タド〜シ ウト〜シ
 ホト〜シ ホノ〜シ ナホ〜シ オボ〜シ オホ、
 シ トホ〜シ オモ〜シ カロ〜シ オドロ〜シ
 タイ〜シ タギ〜シ ウヒ〜シ サキ〜シ クネ
 〜シ マメ〜シ

(2) 名詞の重複

ハカ〜シ ヲサ〜シ オトナ〜シ シナ
 ソバ〜シ キハ〜シ タマ〜シ ウヤ〜シ
 キヤ〜シ カウ〜シ ヤウ〜シ コ、シ カド〜シ
 コト〜シ〔事々〕 ヒト〜シ モノ〜シ ヲ、シ ヨシ
 ミチ〜シ カヒ〜シ ナサケ〜シ オホヤケ
 クセ〜シ ムネ〜シ ヒネ〜シ メ、シ ユ
 エ〜シ

(3) 動詞(連用形)の重複

スキ〜シ ツキ〜シ カケ〜シ

シ ホケ〜シ ハエ〜シ ナレ〜シ ハレ〜シ オ
 レ〜シ ホレ〜シ シレ〜シ
 (4) 副詞の重複

イト、シ ウベ〜シ

この他に、(1)と(4)のいずれ、もしくはそれ以外、に分類されるか未詳のものとしてユヒ〜シがある。^⑪

なお、(1)のヤム〜シは、

駿(略)カタクナ ムヤ、ムシ(略) (僧中九九〔51才〕)

とあるが、「駿(略)加太奈 又也 弁々志」(新撰字鏡享和本)によつてヤム〜シの誤りと見たものである。これについては、東郷吉男氏の研究発表「中古における語幹重複型の形容詞について」(1981・524 国語学会)の当日配布の「資料」を参照した。

また、因みに、音便のもので前稿(四)にふれなかったものについて付言しておく、(2)のカウ〜シ・ヤウ〜シはそれぞれカミ〜シ〔神々〕・ヤミ〜シ〔闇々〕のウ音便と見られる。

さて、重複形容動詞と同様に、参考として、(1)(2)に限らず上代・中古の範囲からさらに例を拾うと次のようである(*印を付したものは東郷氏「平安時代の重複形容詞索引」を、**印を付したものは同氏「平安時代における重複型語幹の形容詞について——かな系文学作品の用例を中心に——」^⑫を、***印を付したものは同氏前掲「資料」を、それぞれ参照したものである。^⑬

- (1) サガ／＼シ (西大寺蔵金光明最勝王經平安初期点) チカ／＼シ (落窪物語) サ、シ (栄花物語) ナマ／＼シ (大和物語・平中物語) キラ、シ (高野山大学図書館蔵蘇悉地羯羅經承保元年点) シブ／＼シ (龍光院蔵妙法蓮華經平安後期点) ニブ／＼シ (狭衣物語) オム／＼シ (雄略紀四年前日本・同図書寮本) フル／＼シ (枕草子) オコ、シ (持統紀元年北野本) トモ／＼シ (新撰字鏡) ツヨ／＼シ (梁塵秘抄) ノロ／＼シ (夜の寢覚・栄花物語)
- (2) トガ／＼シ (堤中納言物語) ワザ／＼シ (蜻蛉日記・夜の寢覚・大鏡) サマ／＼シ (大鏡) チカラ／＼シ (落窪物語) ヨソ／＼シ (余所々々) (狭衣物語) ホド／＼シ (古今六帖・拾遺九一三)
- (3) ワイ／＼シ (石山寺蔵法華經玄贊平安中期点・推古紀卅四年岩崎本) ワキ／＼シ (東大寺諷誦文稿) モヂ／＼シ (天理図書館蔵金剛波若經集驗記) オイ／＼シ (宇津保物語・栄花物語) アリ／＼シ (宇津保物語) ツギテ／＼シ (東大寺諷誦文稿) カへ／＼シ (推古紀卅一年岩崎本) サメ／＼シ (夜の寢覚)
- 右のうち、(2)のサマ／＼シは、
伊周 帥殿の御こゝろもちのさま／＼しくおはしまさば

のような例で、右にはとりあえずサマ／＼シとして挙げたが、日本古典文学大系『大鏡』の頭注に「『さか／＼しく』の誤りか」とあるように、異本に従って(1)サカ／＼シとして挙げるべきものかもしれない。

また、(3)のモヂ／＼シは、

為性剛強猛戾^{モヂセシ}

のような例で、『日本国語大辞典』はモチ／＼シとして挙げ「ただけしく道理にそむいている」意とする。この「ただけしく」とあるのは「猛」についてのことかと思われるが、訓は「戾」についていると見られるので、結局「道理にそむいている」意ということになる。また、東京教育大学大学院中田教授国語学ゼミナール学生編『金剛波若經集驗記古訓考証稿』^⑩は、この例を「孤例」とし「意味未詳。その神の性格が酷でねじているというようなことか。」(この項、大飼隆氏担当)としている。「戾」という用字と、恐らくはそこから考えられたであろうところの「道理にそむいている」なしいし「ねじている」という意味から考えて、これは別稿「モドロカス考——モデルとマダラとの間——」^⑪に述べたモデル(恨)の語群とともにとらえられ、モチ／＼シよりもむしろモヂ／＼シと見られるものである。別稿に言うモデル(恨)の語群とは、モデル(恨)・モデル(戻)・モデル(振)・モヂ・モドク・モドカシ・モドラカス

(綴)・モドロカス(候)を言うが、モヂ／＼もこれに加えられることになる。その際、重複素モヂは、四段活用もしくは上二段活用モヂを想定し、その連用形と見るようになる。別稿に挙げたモヂの諸例も、同様にその連用形ないし居体言と見られよう。

なお、以下、これら参考として挙げたものについては括弧を付して示すことにする。

以上の例について見ると、全体として例が相当あり、(1)形状言の重複のものが最も多く、以下、(2)名詞の重複、(3)動詞(連用形)の重複、(4)副詞の重複、の順となっている。(4)副詞の重複については後に述べる。

重複素の末音節については、(1)形状言の重複のものは基本的にア・ウ・オ列のものであるがイ・エ列のものもいくらかあり、(2)名詞の重複のものはア・ウ・オ列のものがやや多いがイ・エ列のものも多く、(3)動詞(連用形)の重複のものは当然のことながらイ・エ列のものばかりである。

重複素の音節数については、やはり二音節のものが多い。重複素が二音節で縮重複のものに(1)イツ、シ・(オコ、シ)・オホ、シ、(4)イトッシ、同じく一部重複のものに(1)(キラ、シ)がある。他に、一音節のものとして(1)(サ、シ)・ワ、シ・ユ、シ・コッシ、(2)コ、シ・ラ、シ・メ、シ、三音節のものとして(1)オドロ／＼シ、(2)オ

トナ／＼シ・(チカラ／＼シ)・ナサケ／＼シ、(3)(ツギテ／＼シ)、さらに四音節のものとして(2)オホヤケ／＼シがある。

ここで縮重複のイトッシについて一言する必要がある。先にもふれたように、縮重複・一部重複は基本的に形状言の重複に見られる。副詞の重複のイトッ・イトッシはその点でやや問題になるかと思われる。実は、前稿(三)においては、イトッの重複素イトを、イヨ、の重複素イヨの交替形イヤ、およびウタ、の重複素ウタとともに、副詞ないし副詞的接頭語として用いられるとしつつ、イトッならばイヨ、・ウタ、を形状言の重複として述べたのであった。副詞的接頭語として用いられるイヤ・ウタを形状言とするのはよいとして、副詞として用いられるイトについては今少し説明が不足していたように思う。すなわち、イトの交替形イタは形容詞イタシの語幹であるように形状言としてあり、副詞イトも本来的には形状言であると考えられることにふれるべきところであった。イトッ・イトッシは、副詞の重複ではあるが、本来的には形状言の重複であることによつて、縮重複となることができるととらえられよう。

以上、この節では重複形容詞について改めて概観した。

四

さて、ここで重複形容詞と重複形容動詞とを比較することにした

いが、まず、後に述べるとした副詞の重複について考えることにしたい。

重複形容詞には、重複形容動詞と異なつて、(4)副詞の重複のものがあることが注意される。イトゞシ・ウベゞシがそれであるが、やや時代を下るとその他にゲン／＼シ(宇治拾遺物語)のような例もある。

前稿(一)にふれたように、副詞の重複は、重複することによって強調する働きをなしていると見られ、従つて重複しない単独のもので、も文の意味は基本的に充足されるということが出来るもので、語と語が複合して新たに一つの語を構成するものと共に扱ふよりは、むしろ二つのものの並列と認めるべきものであるという性格を持っている。しかしながら、重複するだけでなくさらにシを伴つて形容詞を構成するとなると、それは二つのものの並列にとどまらないものにならざるを得ないであろう。副詞の重複の重複形容詞において、重複素である副詞は重複されて強調され、かつ、シを伴ひシク活用形容詞を構成するとともに意味を内面化して情意的意味を表わすようになると思ふことができる。

このように考えると、重複形容詞に副詞の重複のものがあるのは一応うなずけると思われる。けれども、二つのものの並列にとどまらないものにならざるを得ないのは、重複するだけでなくさらにナ

リを伴つて形容動詞を構成する重複形容動詞についても同様に言い得ることであり、(4)副詞の重複のものが重複形容動詞に見られないことが改めて問われなければならない。

さて、前稿(一)にも見たように、重複形容詞はシク活用であり、ク活用形容詞が情態的意味を表わすのに対して、シク活用形容詞は情意的意味を表わすことが指摘されている。一方、重複形容動詞は情態的意味を表わすものであり、重複してニを伴う情態副詞との関係からもそのように考えられてよい。すなわち、重複形容詞は情意的意味を表わし、重複形容動詞は情態的意味を表わすという差違が両者の間にあると考えられる。

そして、イトゞシ・ウベゞシおよびやや時代の下るゲン／＼シにおいて、その重複素について見ると、イトは程度副詞、ウベおよびゲニは陳述副詞に用いられると見られる。ここで考えられることは、程度副詞や陳述副詞の重複が情態的意味を表わすということがあるだろうかということである。副詞の重複は強調を表わすが、強調された程度副詞や陳述副詞が情態的意味を表わすことは極めてありにくいのではないだろうか。仮に、情態副詞の重複であれば、強調された情態副詞が情態的意味を表わすことは十分考えられてよく、さらにナリを伴つて重複形容動詞を構成することもあり得るのであるが、程度副詞・陳述副詞の重複はナリを伴つて重複形容動詞を構

成することが困難なのではないかと思われる。

尤も、このことは程度副詞や陳述副詞が情態的意味を表わすようになることはないとするものではない。現に、ウベくシの重複素ウベはナリを伴ってウベナリ「諾 此云字每那利」(神武前紀)として用いられる。ただ、程度副詞や陳述副詞が重複されて強調されたものが情態的意味を表わすことは極めて難しいのではないかと思われるのである。

而して、重複形容動詞は程度副詞や陳述副詞を重複素とすることがないであろうと考えられる。重複形容詞はそれらをも重複素とすることができる訳であるが、それは、重複形容詞が情態的意味を表わすというだけでなく、形容詞の構成力の問題でもであろう。前稿(四)において、重複形容詞は、前稿(二)に見た重複動詞に比べて多彩なものを重複素となし得ることについて述べたが、そのことは重複形容動詞と比べても言えるようである。以下、重複形容詞と重複形容動詞との比較を続ける。

重複形容詞と重複形容動詞とを比較してみると、全体として前者86(27)例、後者21(4)例(括弧の中は参考として挙げた例、以下同様)と、前者の方が相当多い。重複素別に分類した場合に、先に見たように、(4)副詞の重複のものは前者に2例あるが後者にはない。その(4)副詞の重複を別にして、前者では、(1)形状言の重複の

重複形容詞と重複形容動詞

の47(13)例、(2)名詞の重複のもの27(6)例、(3)動詞(連用形)の重複のもの10(8)例、後者では、(1)形状言の重複のもの9(1)例、(2)名詞の重複のもの6(2)例、(3)動詞(連用形)の重複のもの6(1)例と、(1)形状言の重複のものが最も多く、以下、(2)名詞の重複、(3)動詞(連用形)の重複、の順である点は、前者も後者も共通しているようである。(4)副詞の重複を、後者0例としてこれに加えても同様である。

重複素の末音節について整理すると、次の表1のようである。a u oとあるのは重複素の末音節がア・ウ・オ列のものを、i eとあるのは同じくイ・エ列のものを示す。それぞれ例を一つ挙げる。数字は例の数である。

表 1		重複形容詞	重複形容動詞
(1)形状言の重複	a u o	ナガくシ	カマくナリ
	i e	ウヒくシ	シマニアリ
		41(13) ⁽²⁾ 6 ⁽²⁾	8(1)
(2)名詞の重複	a u o	ヲサくシ	カズくナリ
	i e	ユエくシ	
		17(6) ⁽²⁾ 10	6(2)
(3)動詞(連用形)の重複	i e	スキくシ	ナミくナリ
		10(8) ⁽²⁾	6(1)
(4)副詞の重複	a u o	イトッシ	
	i e	ウベくシ	
		1	

重複形容詞と重複形容動詞

(4)副詞の重複のものが後者でない他に、(2)名詞の重複のイ・エ列のものが後者には見られない。これが偶然であるかどうか明らかなくないことについては先に述べたが、前者においても後者においても全体としてア・ウ・オ列のものが多く、特に前者の(2)名詞の重複のものにおいてア・ウ・オ列のものが多いところからすると、後者の(2)名詞の重複のものにイ・エ列のものがあるとしても例は少ないであろうと思われる。

重複素の音節数について整理すると、次の表2のようである。①〔4〕とあるのはそれぞれ重複素が一〜四音節のものを示し、重複素が二音節で縮重複ないし一部重複のものはこれとは別に△で示す。それぞれ例を一つ挙げるが、△で縮重複と一部重複との両方の例のあるものは一つずつ挙げる。数字は例の数である。

表 2		重複形容詞		重複形容動詞	
(1)形状言の重複		①	△	①	△
(2)名詞の重複		②	①	②	①
ユ、シ	イッ、シ・(キ)	ラ、シ	ナガ〜シ	オドロ〜シ	カマ〜ナリ
3 (1)	2 (2)	41 (10)	1	5 (1)	2
シマニアリ	ウツ、ナリ	2			
3	3	21 (5)			
カズ〜ナリ	5 (2)				

(4)副詞の重複		(3)動詞(連用形)の重複		(2)名詞の重複	
②	△	③	②	④	③
イトッシ	ウベ〜シ	1	1	オトナ〜シ	2 (1)
1	1	10 (7)	1	オホヤケ〜シ	1
		ツギテ〜シ	1	ココロ〜ナリ	1
		(1)			
		ナミ〜ナリ	5 (1)		
		シンビ〜ニアリ	1		

(4)副詞の重複のものが後者でない他に、(1)形状言の重複の三音節のもの、(2)名詞の重複の一・四音節のものが後者には見られない。先に見たように、全体として前者の例の方が相当多かった。その意味においては、前者にあって後者にはないものがあるのはある程度当然であろう。先に見た(4)副詞の重複のものや、重複素の末音節について見た場合の(2)名詞の重複のイ・エ列のものも含めて、これらはその例になるかと思われる。そして、このことは、前者すなわち重複形容詞の方が後者すなわち重複形容動詞よりも多彩なものを重複素となし得るということに他ならない。副詞の重複のものについて考えた際にもそのように述べたが、その他の点からもやはりそのように考えられる。

なお、右のように見ると重複形容詞と重複形容動詞とはかなりの重なりを見せるかのように思われるかもしれないが、実は必ずしもそうではない。以下、そのことについて補足的に述べておきた

い。

重複形容詞を前稿(四)と同様にXェシと表わし、ナリ活用の重複形容動詞をニアリが縮約していないものを含めてXェナリと表わすこととして、XェシーXェナリの対応を持つものは、(四)(五)の範囲では

(1) 形状言の重複 カマ<>シ<カマ<>ナリ オホ、シーオホ、ナリ

(2) 名詞の重複 ツバ<>シ<ツバ<>ナリ

のみであり、それぞれ範囲を広げて先に参考として挙げた例を含めても

(1) (シブ<>シ)ーシブ<>ナリ

(2) (サマ<>シ)ーサマ<>ナリ (ヨソ<>シ)〔余所々々〕

ー(ヨソ<>ナリ)〔同〕

が拾えるに過ぎない。しかも、先にふれたように(サマ<>シ)の例には疑問もあり、それを含む対応は削られるかもしれないものとしてある。

(3) 動詞(連用形)の重複にXェシーXェナリの対応を持つものが見られないことが少し注意されるが、(3)動詞(連用形)の重複は、重複形容詞においても重複形容動詞においてもそれほど例の多いものではないので、そのために対応を持つ例が見られないのかも思

重複形容詞と重複形容動詞

われる。

全体として、XェシーXェナリの対応を持つものは非常に少ない。つまり、重複形容詞と重複形容動詞とは、ともに形状言・名詞・動詞(連用形)などを重複素としつつも、前者の重複素と後者のそれとは基本的に互いに異なるものなのである。その意味において、重複形容詞の重複素と重複形容動詞のそれとは相補的であると言ってもよいかと思われる。

このそれぞれの重複素が言わば相補的であることについて、例えばこれを重複形容詞が情意的意味を表わし重複形容動詞が情態的意味を表わすことから説くことができるであろうか。しかしながら、重複してニもしくはトを伴った情態副詞と重複形容詞とが重複素を共通にするものはいくらかもあり、重複形容詞の重複素の重複が情態的意味を表わさないのである。そして、前稿(一)に見たように、重複形容詞が情意的意味を表わすのはシを伴ってシク活用形容詞を構成する点にポイントがあるのであるかと思えられた。従って、重複形容詞の重複素の重複は、重複形容動詞の重複素の重複と同様に、情態的意味を表わすと考えられる。してみれば、それぞれの重複素が基本的に互いに異なることをこの点から説くことには無理があるであろう。

重複形容詞の重複素と重複形容動詞のそれとが言わば相補的であ

ることは、むしろ、一般的に形容詞と形容動詞との関係において言えることなのである。形容詞と形容動詞とが語基を共通にするものは

オロカシ(類聚名義抄観智院本)ーオロカナリ(新撰字鏡)
アラタシ(琴歌譜)ーアラタナリ(源氏物語・鈴虫) スクナシ(萬三七四七)ースクナナリ(源氏物語・乙女) ケシ(萬三七七五)ーケナリ(推古紀三年岩崎本)

などが挙げられるが、それらは上代・中古の範囲においては多くないと思われる。^⑧ 上代・中古において、形容詞の語基と形容動詞のそれとは基本的に互いに異なるものであり、重複形容詞と重複形容動詞においてもそれに包摂されて同様にそれぞれの重複素は基本的に互いに異なるものではないかと考えられる。

- 注① 「萬葉」86 (1974・12)
② 「親和国文」10 (1976・2)
③ 『論集日本文学・日本語』1上代(1978・3) 角川書店
④ 「同志社国文学」19 (1981・10)
⑤ 「帝塚山学院大学日本文学研究」15 (1984・2) 予定
⑥ 『国語語彙史の研究』5 (1984・5) 和泉書院 予定
⑦ 山口佳紀氏「タリ型形容動詞の成立」『国語国文』50-12 1981・12) 参照。
⑧ 他に、これら和語のものに対して、漢語のものとしてキヤウくナリがある。

⑨ これによって、前稿④に(イ)の範囲から挙げた重複形容詞のうち、(a)ヲサくシ、(c)ワキくシ、(d)クダくシ・オコ、シは、(イ)の範囲から洩れることになる(ヲサくシ・クダくシは(ロ)の範囲のみから挙げられる)。その他に前稿④と相異なる箇所は本稿で訂正したものである。

⑩ 他に、これら和語のものに対して、漢語のものとしてラウくシ・ゲスシ・コチムくシ・ビ、シ・ザエくシがある。

⑪ ケ、シは、前稿④に述べたように、重複形容詞から除外されるか、もしくは、漢語のものとしてとらえられることになるかと思われるので、以上には挙げなかった。

⑫ 「大阪薫英女子短期大学研究報告」17 (1982・12)

⑬ 「国語学」130 (1982・9)

⑭ 他に、これら和語のものに対して、漢語のものとしてリヤウくシ(宇津保物語・枕草子)・ユウくシ(埤中納言物語)・ゲンくシ(枕草子)がある。

⑮ (1975・5)

⑯ 「親和国文」16 (1981・12)

⑰ (1)スガくシ・ソガくシ、サウドくシ・サクくシ、タヅくシ・タドくシ、カルドくシ・カロドくシ、タイドくシ・タギくシ、(2)ウヤくシ・キヤくシ、(3)ワイくシ・(ワキくシ)をそれぞれ一つに数え、また、(1)オモくシ・(オムくシ)を一つに数えて(ロ)の範囲に入れるならば、80(25)例となる。なお、便宜上、(1)キラくシ・(キラ、シ)を一つには数えなかった。

⑱ 注⑯と同様に数えるならば、42(12)例となる。

⑲ 注⑯と同様に数えるならば、26(6)例となる。

⑳ 注⑯と同様に数えるならば、10(7)例となる。

㉑ 注⑯と同様に数えるならば、37(12)例となる。

⑳ 注⑭と同様に数えるならば、5例となる。

㉑ 注⑭と同様に数えるならば、16(6)例となる。

㉒ 注⑭と同様に数えるならば、10(7)例となる。

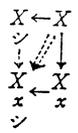
㉓ 注⑭と同様に数えるならば、36(9)例となる。

㉔ 注⑭と同様に数えるならば、20(5)例となる。

㉕ 注⑭と同様に数えるならば、10(6)例となる。

㉖ 形容詞と形容動詞とが語基を共通にするものが、下って抄物などに見られることについては、山田忠雄氏「形容詞スルドシの成立」(『日本大文学部研究年報』4 1954.6)、柳田征司氏「抄物の語彙」(『講座日本語の語彙』4 中世の語彙 1981.11 明治書院)など参照。別稿「ケシ・カシイ・カイ」(『同志社国語学論集』1983.5 和泉書院)にもふれたところがある。

(付記) 詳細について繰り返すことは避けるが、前稿④において、重複形容詞の構成について、単独形容詞(Xシ)の例が見られる(a)(b)のもので、Xシがク活用のものについては



のように、Xシがシク活用ものについては



のように図示した(点線で示したものは……も……も現象上のものであることを示す)。

重複形容詞と重複形容動詞

これに対して、東郷氏は前掲論文において、単独形容詞がシク活用ものについて、ヨサくシはともかく、オトナくシ・モノくシ・オホヤケくシについては、オトナく・モノく・オホヤケく(の例が「全く見られない」で、オトナシ・モノシ・オホヤケシの例は「決して珍しいものとはいえない」)ので、

顕在化していないオトナオトナなどを想定して、例えば、オトナオトナオトナ↓オトナオトナシと考えるよりは、オトナ↓オトナシ↓オトナオトナシと見る方が、妥当性が大きいと考えるのである。と批判された。

しかしながら、Xシ……↓Xxシの経路はあくまで現象上のものであって、Xシを重複してシを伴い重複形容詞を構成したものの(Xシxシ)がある訳ではない。重複素となるのは、XシではなくXシの語基(Xシ)がク活用ものにおいては語幹でもある(X)である。そして、Xシの語基Xを重複してシを伴い重複形容詞Xxシを構成するというのは、Xxが語例として顕在化していると否とにかかわらず、理論的順序としてX↓Xx↓Xxシと与えることに他ならない。

もし仮に、Xxが語例として顕在化していないものは、X↓Xx↓Xxシの経路ではなくXシ……↓Xxシの経路をとっていると考えるとするならば、Xシ・Xxの例のともに見られない(d)のものはどのように構成されたのか、説明することができなくなるであろう。

而して、重複形容詞はいずれも、Xxが顕在化しているものもないものもX↓Xx↓Xxシの理論的順序を経て構成され、それを現象上Xxシと見ていると与えられる。

なお、モノく(の例が、意味するところは多少異なるものながら東大寺諷誦文稿にあること、前稿④にふれた。無論、これが語例として顕在化しているか否かが今問題となるのではない。

重複形容詞と重複形容動詞

以上のように、東郷氏の批判にもかかわらず、前稿^四はこの点について修正の必要を認めない。ただ、単独形容詞がシク活用のもは前稿^四に挙げたものの他にもいくらかあるようであり、その点については改めて考える必要があるかもしれないと思っている。